

重要さと人生の意味

高田 敦史

1. 序

重要であるとはどのようなことか。これが本稿の問題である。ここで念頭にある「重要さ」としては、ごく素朴な意味での重要さを想定してもらえばよい。例えば、私たちにとっては、毎日の食事、家族、数学、好きな映画、正直であること、誰に出会うかなどといったことが重要であるかもしれない。また、「大切」「有意義」「大事」なども、ほぼ「重要」に近い意味をもつだろう。私たちの日常は、きわめて多くの重要な事物に満たされているし、つねに何らかの重要なことを気にかけていると言っても過言ではないだろう。

重要であるとはどのようなことかという問題は、重要であることがほぼ自明な問題である。重要さとは何かを知らなければ、どのような問題についてもそれが重要であると自信をもって判断をくだすことはできないだろう。実際、非常に多くの哲学研究では、重要性に関する主張が述べられている¹。にもかかわらず、重要さとは何であるかという探求はこれまでほとんどなされてこなかった。ほとんどの哲学者は、きわめて無反省に「重要」という概念を使用している。もちろん、それでも何とかなってきたということは、多かれ少なかれ、私たちが重要であるとはどのようなことかについて、前理論的な理解を共有しているということだろう。本稿では、その前理論的な理解をもっと明確にすることを目指す。前半では、重要であるとはどのようなことかを明らかにする。私の分析によれば、何かが重要であるということは、それが価値に関して大きなちがいをもたらすということである。また、私の分析では、重要さの主要な担い手は問いであり、疑問文に対する重要さの帰属が主要な事例として分析される。

後半ではこの分析を哲学的問題の解明のために実際に役立てることで、その

能力を確かめる．ここでは重要さと人生の意味のつながりを明らかにする．人生の意味に対するニヒリズムは、伝統的に「何も重要ではない」という言葉で表現されてきた．私は何も重要ではないとはどういうことかを分析し、なぜ何も重要でなければ人生の意味がなくなるのかを説明する．また、本稿の重要さに関する分析を使って、人生のアホらしさに関するネーゲルの議論を再構成する．

2. 重要であるとはどのようなことか

2-1. 価値と重要さ

以下では、「良さ goodness」「悪さ badness」という言葉を、福利、道徳的価値、美的価値、認識的価値など多様な種類の正の価値／負の価値を指示するために使用する²．最初に、重要さを良さ／悪さと比較することで、両者がかなり異なったものであることを見てみよう．

重要なものがつねに良いものであるわけでもないし、良いものがつねに重要なものであるわけでもない．例えば、私が病気になるという可能性は、良いことではないが、私にとっては重要なことだろう．あるいは、どちらに転んでも良い結果をとまうような選択を考えてみよう．遠回りの道を選べば、景色を楽しむことができるし、近道を選べば、早く目的地につくことができる．こうした場合、どちらの可能性も私にとって良いものであるが、どちらを選ぶかは重要ではない．つまり、重要さは良さ／悪さにともなうこともあれば、ともなわないこともある．また良さ／悪さは二極性をもつ．「良い」が正の価値をもつのに対し、「悪い」は負の価値をもつ．ところがこれは重要さに関しては成り立たない．重要さの反対の性質として、「どうでもよさ」などをあげることができるかもしれないが、何かがどうでもよいことは、重要さの欠如であり、負の重要さをもつというわけではない．

また、以下のような文法上のちがいを指摘したい．

1. 太郎がパーティにくることが重要だ．
2. 太郎がパーティにくることが良い．

3. 誰がパーティに来るかが重要だ.
4. # 誰がパーティに来るかが良い.

良さ／悪さも重要さも平叙文を補文としてとるが、疑問文をとることができるのは重要さに関する文にかぎられる．4のような文は意味をなさない．「重要である」は、「知る」「教える」「気をつける」などと同様に、疑問文をとることができる．

以上の簡単な考察によれば、重要さは良さ／悪さの必要条件でも十分条件でもなく、尺度としての特性も異なっており、文法的にも異なったふるまいをする．重要さが、単なる良さとはかなり異なったものであることを示すにはこれだけでも十分だろう．ただし、何かが重要であるという判断が、広い意味での価値に関する判断であることは否定しがたいように思われる．それは規範性を帯びた判断であり、適切な態度をとることを要求する．しかし、良さ／悪さについての判断ではないが、それでも広義の価値判断であるとはいったいどういうことなのだろうか．

2-2. フランクファートの分析

重要さの哲学的分析は、私の知るかぎり、フランクファートの一連の論文しかない(Frankfurt (1982), Frankfurt (1999)). フランクファートによれば、何かが重要であるとは、それがちがいをもたらすということである．

事物が重要さをもつのは、それがもたらすちがいのためであると想定することはもっともらしい．もしあるものが存在するかどうか、あるいはそれが特定の特徴をもつかどうかは何のちがいももたらさないのであれば、そのものの存在もその特徴も何であれ何の重要性ももたないであろう．

Frankfurt (1982), p.259

例えば、私が重い病気であることは、私にとって大きなちがいをもたらすが、どちらの足から靴を履くかはちがいをもたらさない．この時、私が重い病気であるかどうかは重要だが、どちらの足から靴を履くかは重要でない．以上のよ

うに、何のちがいがもたらさないものは重要ではないという指摘はもっともらしい。

しかし、この分析ではあまり多くのことはわからない。厳密に言えば、そもそも任意の事物は何かしらちがいをもたらすはずである。重要さにつながるちがいと、重要さにつながらないちがいはどのように区別されるのか。フランクファートはここで分析を断念し、何かが重要であるとは、そのものが**重要な**ちがいをもたらすということであるという循環的な説明しかできないとしている。「この循環に陥らずに有用な説明を作り上げられるかどうかは明確ではない」(Frankfurt (1982), p.259). フランクファートによれば、重要さはあまりにも基礎的であるために定義することができない。

ただしフランクファートは、もう一点注目すべき指摘をしている。気にする・気にかけること **caring about** といった態度は、重要さと密接に結びつく。フランクファートによれば、重要であると見なすことと、気にすることの間には必然的なつながりがある。私が何かを気にしているのであれば、私はそれを重要であると見なしているし、反対に私が何かを重要であると見なしているのであれば、私はそれを気にしている(Frankfurt (1999)).

両者の関係は規範的なものである。重要さは何かを気にかける理由を与える(Frankfurt (1982), p.269). 行為者が何かを気にかけることは、行為者の態度に関する事実の問題であるが、何かが重要であるということは、それを気にかけるべきである(気にかける理由がある)という規範の問題である。行為者は重要さの判断を誤ることがありえる。行為者は何かが重要であることに気づかないために、それを気につけないかもしれない。また、誤って重要なものであると見なしたために、気にかけるに値しないものを気にかけてしまうこともありえる³。

2-3. 問いの意味論

重要さの帰属には、下記の 3 つの文に見られるように、(1)もの(名詞)に対する重要さの帰属、(2)命題(平叙文)に対する重要さの帰属、(3)問い(疑問文)に対する重要さの帰属の三種類がある。

5. この本が重要だ。

6. 太郎がそこにいることが重要だ.
7. 誰がパーティにくるかが重要だ.

私の分析では、問いに対する重要さの事例を中心的な対象として扱う⁴。ここでは、近年の形式意味論における問いの意味論を参照しつつ分析を与えるため、最初に問いの意味論について簡単に説明しておく(Cross and Roelofsens (2016), Hagstrom (2003)).

ここで使用している「問い question」という語は、形式意味論で使用される用語法に従っている。日本語の「問い」という語は言語行為としての問うことを連想させるかもしれないが、ここで「問い」と呼んでいるのは、行為ではなく、疑問文が直示する対象にあたるものである。問いの意味論では、多くの場合、問いは命題の集合かそれに類似したものであるとされる。命題がときに可能世界の集合と見なされるのに対し、問いは、論理空間を分割する複数の可能性(命題)の集合であり、可能世界の集合の集合にあたる⁵。平叙文の主要な機能が言語行為としての主張、つまり特定の命題を真なるものとして提示することにあるのに対し、疑問文の主要な機能は言語行為としての疑問、つまり、どれが真であるのかを明示しないままに、複数の可能性を分割して提示することにある。

疑問文には、wh 疑問文、極性疑問文、選択疑問文の三種類があると言われる。wh 疑問文の例は「何を飲むのか」「いつくるのか」など疑問詞を含むもの、極性疑問文の例は「コーヒーを飲むのか」「今日くるのか」などイエス・ノーで答えられるもの、選択疑問文の例は「コーヒーを飲むか、お茶を飲むか」「今日くるのか、明日くるのか」など、選択肢を提示するものである。問いを構成するのは、これらの疑問文の答えの候補になるような命題である。「何を飲むのか」という wh 疑問文の場合、答えの候補は「X を飲む」という形になり、具体的には「コーヒーを飲む」「お茶を飲む」などがその要素にあたるだろう。一方「コーヒーを飲むのか」という極性疑問文の場合、答えの候補は「コーヒーを飲む」「コーヒーを飲まない」の二択になる。「今日くるのか、明日くるのか」という選択疑問文の場合、「今日くる」「明日くる」という選択肢がそのまま答えの候補になる。

ここで特に関心があるのは、疑問文を他の文に埋め込む事例であるため、埋め込みの例をあげよう。以下の例に見られるように、「知っている」「調べる」「予想する」などの動詞は疑問文をとることができる。

8. 太郎は花子がいたのかどうかを知っている。

8 のような文では、花子がいたのかどうかという問いが、知識の対象としてあげられている。さらにこの文が意味するのは、太郎が「花子がいたのかどうか」という疑問の答えを知っているといった事態だろう。このような例で、疑問文が答えの集まりを直示するために使用されていることは見やすいだろう。

2-4. 重要さの分析

では、実際に、重要さに関する文を分析していこう。

9. 誰がパーティにくるかが重要だ。

上は、誰がパーティにくるのかという問いが、良さ／悪さに大きなちがいをもつ場合に真である。

命題	価値
タカシがパーティにくる	(1)
花子がパーティにくる	(2)
ヒロシがパーティにくる	(3)

花子がパーティにくるという可能性が良いことであり、(2)が高い正の価値に対応するでしょう。反対にヒロシがくるという可能性は、悪いことであり、(3)は負の価値に対応するでしょう。このような事例では、誰がパーティにくるのかという問いの要素がそれぞれにもつ価値は大きくちがう。この場合「誰がパーティにくるのか」が重要である」という言明は真である。反対に、(1)(2)(3)のどれも、良さ／悪さに関してほとんど変わりがいない場合「誰がパーティにくるのか」が重要である」という言明は偽である⁶。

一般化すれば、 q という問いが重要であるのは、ある q の答え x, y が価値に関して大きく異なるちょうどその場合である。「誰がパーティにくるかが重要だ」は、誰がパーティにくるかによって価値に関して大きなちがいがあるということの意味し、「いつ計画を実行するかが重要だ」は、いつ計画を実行するかによって、価値に大きなちがいがあるということの意味する。

またこの際「大きく異なる」という表現は、「重要さ」の文脈依存性を反映するように意図している。例えば、日常会話では、どこで昼食を食べるかは重要であるが、命に関わる危険を考慮している場合であれば、どこで昼食を食べるかは重要ではないだろう。このように、実際に何が「大きく異なる」ことに数えられるのかは、話し手の目的や置かれている状況によって定まる。これと同様の例は多くの段階的形容詞で観察される。例えば、「背が高い」は文脈依存的であり、バスケットボール選手の話をしている場合と、小学生の話をしている場合では「背が高い」の規準は異なるだろう⁷。ここで想定しているのは、これと同様の文脈依存的な規準が重要さの場合にもあるだろうということである⁸。

フランクファートの懸念は、重要さを構成するちがいをそうでないちがいでから区別しようとしたとき、循環的な定義に訴えなければならないのではないかというものだった。私の分析では、任意のちがいが重要さを構成するわけではない。重要さを構成するのは、価値に関するちがいに限定される。これは、フランクファートの懸念に反し、循環性を帰結しない。もし、良さ／悪さが重要さに依存したものであれば、分析は循環的になってしまうが、そう考える理由ははっきりしない。

また、私が重要さを構成するちがいを「大きなちがい」に限定していることが循環性を帰結するのではないかという指摘があるかもしれない。しかし基準が文脈によって変化することは、多くの段階的形容詞で成り立つことであり、それによって重要さの分析が循環的になる恐れはないだろう。

また、重要なものとはちがいをもたらすものであるというフランクファートの分析はもっともらしいが、フランクファートはそれが何の間のちがいなのかを特定していない。しかし、ちがいとはつねに何かの間のちがいだろう。問いに着目した場合、問題になるのは、問いに対する答えの間のちがいであるとい

うことは明確になる。実際フランクファート自身も、ちがいをもたらすものの例として「あるものが存在するかどうか、あるいはそれが特定の特徴をもつかどうか」といった問いをあげている(Frankfurt (1982), p.259)。

なお、上記の分析では価値の種類に限定をかけていないことは注意しておきたい。興味深いのは、価値の種類と重要さの種類が対応する点である。例えば、多くの論者は行為者相対的価値と、端的な価値を区別する。前者は**太郎にとって良い**といった行為者に相対的な良さ／悪さに対応し、後者は、修飾なしの不偏的な良さを意味する。これに対応し、行為者相対的価値のちがいは、行為者相対的重要さ(個人にとっての重要さ)を構成し、端的な価値のちがいは、端的な重要さを構成するように思われる。また、道徳的価値、美的価値といった価値の種類に対応し、道徳的重要さ、美的重要さなどを考えることもできるだろう。例えば、ある絵が真作であるか贋作であるかという問いは、美的価値に大きなちがいをもたらすために、美的に重要であると考えられる。

3. 重要さの懐疑論

3-1. 重要さと人生の意味

以下では、前半で提示された重要さの分析によって、人生の意味、特に人生の意味に対するニヒリズムの問題と重要さとのつながりを明らかにする。

最初に人生の意味とは何かを多少なりとも明確にしておこう。ただし、人生の意味について、共有された明確な定義があるわけではない。あくまでも、本稿での作業に必要な範囲で、人生の意味とは何かを敷衍しておこう。多くの論者が最低限同意するところでは、人生に意味があることは、人生の良さのひとつである。人生の意味とは、個々人の人生がもつ肯定的・最終的価値であり、意味があることは、幸福であることや、道徳的に正しいこととは区別される別種の価値である(Metz (2007))。

例えば、行為者が自らの仕事に高い目標を掲げ、それをライフワークとして追求するという事例を考えてみよう。それは、誰も挑戦したことのないプロジェクトを成功させることかもしれないし、新たな知識をもたらすことかもしれない。こうした場合、行為者が目指すものは、狭い意味での自己利益や幸福で

はないだろう。むしろ反対に、困難な仕事は、本人の幸福を犠牲にするかもしれない。また、この種の挑戦は、必ずしも道徳的な要請からなされるわけではない。ライフワークの追求は、当人にとって、義務ではなく、むしろ個人的な野心としてなされるだろう。典型的には、こうした目的の追求と達成が、人生に意味を与えるとされる⁹。

また、人生の意味のもう一つの重要な側面は、それが生の理由を与えるものでもあるという点である。それなしにはもはや生きつづける理由を失ってしまうようなもの、あるいは、そのために生きるに値するようなものが、人生に意味を与えるとと言われる¹⁰。もちろん私たちは、単に死に際しての苦痛を避けるためや、生涯の福利の総計を増やすために生きつづけることもあるかもしれない。しかし、ここで想定しているのは、苦痛をえるとしても、あるいは幸福を損なうとしても、そのために生きるような理由を与えるようなものである¹¹。

また、人生の意味を与えるものには、主観的側面と客観的側面がある。別の言葉で言えば、人生の意味には、人生を生きる当人の目的の充足と、その目的がより広く共有された価値規準においても善であるという二つの側面が必要とされる。目的はまず当人がそれに賭け、それを目的とするようなものでなければならない(主観的側面)。一方、行為者は単なる個人的な趣味のためではなく、それらが目指すに値する価値ある目標だからこそ、その達成を目指す(客観的側面)。スーザン・ウルフによれば、「意味は主観的魅了と、客観的魅力が出会うときに生まれる」(Wolf(2011), p.224)¹²。

重要さと人生の意味とのつながりはしばしば指摘されてきた。「意義」という語は、「意味」の類義語であるが、「重要さ」とも類似した仕方で使用される¹³。とはいえ、これは直観的なつながりをほめかしている以上のことではない。以下で私が試みるのは、前節までの重要さの分析を道具立てとして、両者のつながりをもっと明確にすることである。

何も重要ではないという主張を認める立場を、重要さのニヒリズムと呼ぶことにしよう。前節では、重要さを、価値の種類に応じていくつか分類したが、ここで想定している重要さのニヒリズムは、あらゆる種類の重要さの欠如を主張するものである。それは、行為者相対的な重要さも、端的な重要さも、道徳的重要さも、美的重要さもないという立場である。少なくとも直観的には、重

要さのニヒリズムからは、誰のどんな人生にも意味はないという、人生の意味のニヒリズムが帰結するように思われるし、実際そのように主張されてきた¹⁴。何も重要でないならば、重要な目標も重要な仕事も何もなくなってしまう。つまり、重要なものがあることは、人生の意味の必要条件であるように思われる。しかし、何も重要ではないということがどのようなことであるのかはまだ明確ではないし、なぜ重要さが人生の意味の必要条件であるのかも明確ではない。

3-2. 「何も重要ではない」

重要さのニヒリズム、つまり何も重要ではないという主張は何を述べているのだろう。ガイ・カヘインは、重要さのニヒリズムを信じるのが何をもたらすかを論じている(Kahane (2016))。その際カヘインは、何も重要ではないという事態を以下の二つの両方が成り立つこととして理解している。

1. 評価的ニヒリズム: 何も良くもないし、何も悪くない。
2. 実践的ニヒリズム: 何をする理由もない。

これを批判の叩き台とすることで、何も重要ではないということはどういうことであるのかを明らかにしよう。カヘインの立場では、何も重要ではないという事態は、価値の喪失、規範的理由の喪失として理解される。もちろん、良さ、悪さの喪失が重要さの喪失を帰結するということが自体は問題ないだろう。私の分析が正しければ、重要さは価値のちがいによって構成される。従って、良いものも悪いものもいっさい存在しなければ、重要なものも何もない。

しかし、この逆は成り立たない。価値があっても重要さがない状態もありえる¹⁵。よって、カヘインの理解は正しくない。以下、3つ例をあげよう。

(1)有神論者の一部は、神の目的によって私たちが作られたということは、それだけで私たちの人生に価値を与えると考える。ここでは、この発想を推し進め、神によって作られたということによって、私たちは至上の善をえることができ、人生はこの上なく良いものになると考えてみよう。この奇妙な捉え方では、私たちがどのように生きるのかはいっさい重要ではない。なぜなら、私たちがどのような生き方をしようとも、被造物であるかぎり、私たちは至上の良

さをえるからである。人生に絶望して自殺しても、家族に愛されて天寿をまっとうしても、この上なく良い人生であったことになる。この場合、いかなる間いも重要さをもたないし、どのような出来事が起きててもかまわないことになるだろう¹⁶。

(2)反対に、存在するいっさいはこの上なく最悪のものであるという究極のペシミズムを考えることもできるだろう。この捉え方でも、どのような人生を送るかは重要ではない。どのような生き方をしたかとは無関係に、どの人生もこの上なく悪いものであると結論することができるからである。

(3)良い人生も悪い人生もあるが、どれも**大きくはちがわない**という立場もありえる。この立場によれば、最善の人生も、最悪の人生も、似たようなものであり、わずかな価値に差があるだけなのだから、どのような人生を送るかは重要ではない¹⁷。

いずれの場合でも、良さや悪さというものは存在するが、何も重要ではない。この点で、価値の喪失と重要性の喪失を同一視することには問題がある。また、重要性の喪失から生じる問題は、上記のようなケースでも共有されている。上記のいずれの例でも、どのような生き方も、他の生き方に比べて大きく良いということはない。何も重要ではないということは、どのような人生にも十分なちがいがなく、人生を気にかける理由がないということを帰結する。これは人生が悪いものであるとか、不幸であることとは異なっている。これが意味するのは、不幸な人生でも幸せな人生でもあまり変わらないということだからである。もしこれが真であれば、人生におけるいかなる選択も、サイコロを振って決めても問題ないような恣意的なものになる。重要さの喪失は、人生に対する**真剣さ**を奪うのである。

これがなぜ人生の意味の喪失をもたらすのかを、先の主観的側面と客観的側面の区別に即して説明しよう。先に区別したように、重要さについても、行為者相対的重要さと、端的な重要さを区別することができる。前者は主観的側面に、後者は客観的側面に関わる。主観的側面について言えば、人生の意味を与えるものは、人生を生きる当人にとって重要なものでなければならないように思われる。もし、何が起きてても、私にとっての良さ／悪さに、十分なちがいがなくしよう。この場合、私にとって真剣に気にかけるに値することは何もしな

い。私は何らかの目的を真剣に追求するような理由をもたないだろう。

客観的側面について言えば、人生の意味を与えるものは、端的に重要なものでなければならないように思われる。もし、端的に重要なものが何もないのであれば、端的に重要な目的は何もなくなる。当人がどのような人生を送ろうとも、それによって世界が大きく良くなることも、悪くなることもない。他の目的に比べて、達成するに値する目的というのは存在しない。

さらに、これによって、私たちは生きつづける理由も失なう。もし、どんな人生を送っても大したちがいがないのであれば、明日死んでもかまわないことになるだろう¹⁸。総じて、重要性の喪失は、ある特定の形の人生を送ることや、特定の目的を選ぶことの必然性を喪失させる。何も重要でないのであれば、どのような人生も、どのような目的も変わりがない。これは人生の意味の主観的側面も、客観的側面も、生きつづける理由も破壊してしまう。

従って、何も重要でないならば、誰のどんな人生にも意味はない。このことの興味深い帰結は、人生の意味は、単に事物の価値だけではなく、価値の分布にも依存しているということである。(1)の事例のように、すべてが最善である場合にも私たちは人生の意味を失なうことになるという点を考えれば、これは理解しやすいだろう。

3-3. 重要さの懐疑論

以下ではさらに、人生の意味に関する過去の議論を上記のような観点から明確化できることを論じよう。ここでは、人生のアホらしさに関するトマス・ネーゲルの有名な論証を取り上げたい。

ネーゲルによれば、私たちは、人生を内部から眺める通常の行為者としての視点と、それらを疑い、そのすべてが重要ではなくなるような外側からの視点の両方をもつことができてしまう。一方で、通常の行為者として生きていくかぎり、生活や名誉やその他のものを重要であると見なし、それらを気にかけて生きていかざるをえない。こうしたギャップは人生をアホらしいものにする¹⁹。何かがアホらしいということは、その見せかけや志が現実とかけ離れていることを意味する(Nagel (1971), p.718, 邦訳, p.21)。実際、きわめてどうでもよいことに真剣になっているということはどこか滑稽なことだろう。ネーゲルによれば、

宇宙的視点では、私たちはみなどうでもよいことに真剣になっているため、全員がこの滑稽な状況に置かれている。

ネーゲルの議論は単なる人生の無意味さを示す論証とは見なせない。それはむしろ以下のような立場を支持するものである。

重要さの懐疑論

重要さのニヒリズムの否定は、重要さのニヒリズムよりも正当化されているわけではない。

ここでいう「正当化」という語は何らかの理由によって支持されるということの意味している。その正当化を実践的正当化と呼ぶべきか、認識論的正当化と呼ぶべきかはわからないが、いずれにせよ、何らかの適切性の規準において、重要さのニヒリズムはその否定よりも不適切であるわけではない²⁰。言い換えれば、重要さの懐疑論の主張は、何も重要ではないと見なすニヒリストには、その態度を改める理由はないというものになる。もしこれが正しかったとしても、実際に何も重要ではないという結論はそこから出てこない。これが述べていることは、ニヒリズムも、非ニヒリズムも、同程度には正当化されているということにすぎない²¹。

これが正しいと仮定すると、私たちはどのような生き方を選ぶべきだろうか。私たちは現実には多くの物事を重要であると見なし、さまざまなことを気にかけて生きている。重要さの懐疑論が正しいとしても、その生き方を改めるべきだということにはならない。しかし何かの拍子に、何も重要ではないという疑いにとらわれることは十分ありえることだろう。重要さの懐疑論が正しければ、私たちは、重要さのニヒリズムに反論することができない。重要さのニヒリズムを捨てるべきだという理由も特にないのである。それは反ニヒリズムと少なくとも同等程度には正しい見方なのである。

この重要さの懐疑論はどのように擁護されるか。ネーゲル自身がどのような論拠をあげているのかは明確ではない。しかしここではその一つの明確化として、きわめて高い規準の設定による議論を取り上げたい。私の分析によれば、何かが重要であるということは、大きな価値のちがいをもたらすということであ

ある。しかし、重要さに関して、何を大きな価値のちがいに数えるかは文脈によって異なる。従って、極端に高い参照点を設定すれば、何も重要ではなくなる。伝統的には、このことは、宇宙の大きさや、時間の長さによって表現されてきた。宇宙は広く、その歴史は長く、私たちはその片隅の小さな星にほんのわずかな時間だけ影響を与えられるにすぎない。今私たちが重要であると思っているどんなことも、宇宙の中の小さなしみをわずかに動かす以上のことではない。従って、何も重要ではないし、最善の人生も、最悪の人生も大したちがいはない。前節ですでに見たように、最善の人生にも最悪の人生にも大きなちがいがないのであれば、何も重要ではないし、人生に意味はない。

この議論において宇宙の物理的な広さは、通常の人間的な基準よりもはるかに高い基準を設定するための象徴的な役割を果たしている。どんな歴史的な偉業も実は小さなことだというために、宇宙が引き合いに出されているにすぎない。仮に宇宙が小さかったとしても、同様の議論はできるかもしれない。また、芸術的達成のような一見すると時間や空間と関係のない事柄にも適用できる議論になっている。例えば、人類史上稀に見る芸術達成も、極めて高い規準のもとでは、それがもたらすちがいは小さなものである。もちろん以上で示されるのは、**極端に高い基準のもとでは、何も重要ではない**という限定付きの主張にすぎない。しかし、これ自体は正しい主張だろう。極端に高い基準のもとでは、何も重要ではないということ自体は、物理的な大きさに関して、極端に高い基準を設定すれば、有限の大きさのどんなものも小さいというのと同じくらい自明なことだろう。

しかしこの際、以下の原理はもっともらしいように思われる。

基準の均等性

重要さの判断において、いかなる基準を採用するのが適切であるかは使用に際しての実践的理由だけによって決まる。さまざまな基準のうち、特権的なものは存在しない。

これは、「重要である」が「大きい」などと同様の文脈依存的な段階的形容詞であることによって擁護される。例えば、大きさを評価するにあたって、特権

的な基準というものは存在しない²²。大きさをもつどのようなものも、何らかの基準では大きいし、何らかの基準では大きくない。私たちは実践的理由に従って、どの基準を採用するかを決める。惑星と比較すれば、どんな家具も小さいが、その基準は、購入する家具を判断するためには役立たないだろう。しかし、家具がいかなる基準とも独立に、端的に大きいか小さいかということは意味をなさない。ニヒリストは、極めて高い基準を設定した上で、何も重要ではないと述べる。しかし、何かが重要であると判断する人々も、ニヒリストと根本的に異なるわけではなく、単にニヒリストとは異なる基準を採用しているにすぎない。いずれの規準においても、その規準を採用した上で、何かが重要であると見なしたり、何も重要ではないと見なすことは適切である。

では、私たちは、ニヒリストに対して他の基準を設定するよう説得することができるだろうか。実践的理由によって、ニヒリストに基準を下げさせることはできないように思われる。家具の大きさを評価する人とはちがって、すでに高い基準を設定しているニヒリストにとって、どのような目的もまったく重要ではないからである。どのような実践的目的も、宇宙の片隅に小さな影響を与える以上のことではない。少なくともニヒリストはよりよい生活や名誉や知識の獲得のために、基準を下げる理由をもたない²³。それどころか、およそどのような善をもちだしても、ニヒリストにとって反応に値するような大きなちがいはならない。このため実践的な目的に訴えることは、ニヒリストに対する反論にならないのである。

従って、ニヒリズムと反ニヒリズムはそれぞれの文脈において正しく、しかもニヒリストはその文脈を変更する理由をもたない。以上の帰結は、ネーゲルが示唆している正当化の循環に近いものだろう。私たちは、反ニヒリズムを前提とした上でしかニヒリストに応答することはできないのである。

われわれはただ、それらの諸規準がはたらいっているのを眺め、それらが疑問に付されたならば、無益にも、それらの諸規準自身を参照することによってしかそれらを正当化することができない、ということを認識するだけである。われわれはその成り立ちからしてそれらの諸規準に固執するように出来ているが、現在のわれわれにとって重要であったり、深刻であった

り、貴重であつたりするように**思える**ことも、もしわれわれが異なったありかたをしていれば、そうは思われないのである。Nagel (1971), p.722, 邦訳, p.29.

以上のように再構成された議論に関しても、おそらくさまざまな反論があるだろう。しかし、紙幅の都合上反論をこれ以上検討することはできない。

結論：人生のアホらしさ

以上では、まず重要であるとはどのようなことであるのかを明らかにした。あるものが重要であるとは、それが価値に関して大きなちがいをもたらすということである。

つぎに、何も重要ではないというニヒリズムの主張を明確にすることで、人生の意味と重要さのつながりを明らかにした。何も重要ではないとは、最善の人生も最悪の人生もあまり変わらないということを意味する。この見解は、人生に対する真剣さを奪い、生きつづける理由を奪う。何も重要でなければ、すべての人生は無意味になる。最後に、ネーゲルの議論を再構成することで、ニヒリズムは非ニヒリズムと同程度には正当化されているという重要さの懐疑論を検討した。極めて高い規準では、すべては重要ではないし、ニヒリストはその規準を下げるような理由をもたない。

重要さの懐疑論が正しいとすれば、私たちは何を失なうのだろうか。この立場によれば、私たちが日々の幸福や仕事の達成を気にかけることに反する理由があるわけではないし、私たちは、人生に対する真剣さを捨てる必要はない。しかし、人生に対する真剣さを疑問に付すことも許されている。きわめて高い規準のもとでは、何も重要ではないということも正当である。この規準に従えば、私たちは極めてどうでもよいことを日々真剣に追求している。従って、ネーゲルの言うように、私たちの人生は、少なくともひとつの規準のもとでは、アホらしいものであり、人生に対するアイロニカルな態度は適切なものである。

しかし、このことの肯定的な側面も強調しておくべきだろう。ファインバーグの言うように、人間存在の中心にジョークがあることは、時に私たちを喜ば

せる(Feinberg (1980), p.279). 人生に対してつねに真剣であらねばならないということは、ひどく疲れるようなことでもある。反対に、どんな悩みも小さなことにすぎないということは、時には救いにもなるだろう。

註

- ¹ 例えば Parfit (1984) は、通常そう思われているのとはちがひ、人の同一性は重要ではないという主張を擁護している。つまり、そこでは重要性を巡る判断自体が哲学の争点となっている。
- ² 「善」「悪」という語も同義なものとして使用する。ただし、日本語の「善悪」には倫理的な含みがあるので、なるべく「良さ」「悪さ」の方を使用する。
- ³ ただし、フランクファートは、行為者が何かを気にかけることによって、それが行為者にとって重要なものになるという原理も擁護している。この原理に関して、私は Benbaji (2001) の批判に同意する。Benbaji (2001) が指摘している通り、そのような事例があることは正しいとしても、この原理がつねに成り立つという主張はもっともらしくない。
- ⁴ 名詞および平叙文に対する重要さの帰属について本稿で扱うことはできない。Patrick D. Elliot and Uegaki (forthcoming) は「重要である matter」などの動詞に関して平叙文と疑問文の埋め込みを本稿とはちがったアプローチで扱っている。
- ⁵ ただし、命題を可能世界の集合と見なす立場には異論も数多くあることには注意しておきたい。ここでこの話題を持ち出したのはあくまでもイメージメイキングのためである。
- ⁶ 答えの集合の中には、「タカシがくる」「ヒロシがくる」という単純なものだけではなく、「タカシとヒロシがくる」のような、複合的なものを含める必要があるかもしれない。例えば、タカシとヒロシは仲が悪く、二人の両方がくる場合のみ事態は非常に悪いのだが、それ以外のケースでは特に良くも悪くもないという状況を考えよう。この場合でも、「誰がパーティにくるのが重要である」は真であるかもしれない。
- ⁷ ここでいう規準は、価値づけの順序のことではなく、その参照点よりも上を「大きなちがひ」「背が高い」と見なすような基準点の設定のことである。これをもっと明示的に記述するならば、規準を指示する文脈依存的な指標 c といったものを考え、 $x > c$ の場合「 x は重要である」などの形にすればよい。段階的形容詞の分析としては Kennedy(2007)などを参照。
- ⁸ 紙幅の都合上省かざるをえなかったが、もう少し複雑な事例として犯罪捜査において「庭師が室内にいたかどうかが重要である」という場合や、天候予測で「気圧の上昇があったかどうか重要である」という場合を想定できる。これらの言明では直接的に良さ／悪さのちがひが問題になっているわけではないように思われる。しかしこれらの事例でも、それらの問いによって表現される情報が重要性をもつのは、それが行為選択の価値に影響を及ぼすからだということをもっともらしいだろう。つまり、「庭師が室内にいたかどうか重要だ」という場合、庭師が室内にいたかという問いの答えによって、後続する行為の価値が変化する。そのように考えれば上記の事例もこ

での分析に近い形で扱えるだろう。

9. 価値あるプロジェクトの達成以外に、人生に意味をもたらすものとして典型的にあげられる例としては、家族や友人関係がある。
10. ただし、本人にとって生きる理由が欠如していることは、当然ながらその人を殺して良いということを意味しない。人生の意味の問題と道徳的地位の問題は直接にはつながらない。
11. ウィリアムズは生きつづける理由を与えるような欲求のことを定言的欲求 *categorical desire* と呼んだ(Williams (1973)). この言葉を使うなら、定言的欲求の対象となり、それに値するようなものが、人生の意味を与える。定言的欲求の追求と実現が人生の意味を与えるという主張については、Wolf (2011), p.56などを参照。
12. ただし、人生の意味については主観説と客観説の対立があり、主観的側面しか必要ないという論者も、客観的側面しか必要ないという論者もいる。しかし、ここでの目的のためには、この二つの側面がしばしば関連する要素としてあげられるということを確認しておけば十分だろう。
13. 例えばハンフリングは直接的に、「意味と**重要性** *importance*の間には密接な関係がある」と述べている。Hanfing (1987), p.46. 邦訳 pp.81-82.
14. Hare (1972) は重要さのニヒリズムが登場する古典的な論文である。ヘアの友人である若いスイス人がカミュの小説を読み、何も重要ではないと言って、絶望に陥る。Nagel (1971) は人生の意味に関する論文であると言われるが、そこで最初に検討されているのは、われわれが行なっていることはどれも百万年後には重要でないという可能性である。
15. ただし Kahane (2016) は「何も重要ではない」という表現の分析を目指したものではなく、評価的ニヒリズムの帰結を追求する論文であると捉えれば、このこと自体はカヘインの論文の欠点とは言えないかもしれない。
16. なおクエンティン・スミスはこれに近い立場を擁護している。スミスによれば、この宇宙はすでに無限の善を含んでおり、われわれが何をして、善の総量を増やすこともへらすこともできない(Smith (2003)).
17. なお、ここでは何も重要ではないことと、どのような生き方をするかは重要ではないことを同一視している。正確にはこれは正しくない。私たちがどのような生き方をするかは重要ではないとしても、人類には到達不可能な宇宙のはるか彼方で崇高な戦いがなされており、それは重要だといった事態も考えられるからである。しかし、ここでの関心は、重要さが人生の意味の必要条件であることなので、そのようなケースは特に無視してもかまわないだろう。
18. ただし、生きつづける理由がないということは、今すぐ死ぬ理由があるということの意味するわけではない。むしろ重要さのニヒリズムが正しければ、ほとんどの行為からは理由が失なわれるし、生きる理由も死ぬ理由もなくなるだろう。
19. 訳者である永井均は *the absurd* を「人生の無意味さ」と訳しているが、この訳語の選択には問題がある。ネーゲルが「アホらしさ」と呼んだものは、人生が無意味であるということではなく、別の視点では無意味であるようなことを、真剣に気にかけているというギャップから生じるものだからである。
20. おそらく、価値について認知主義をとるなら、重要さについての判断についても真偽が成り立ち、上記の正当化は認識論的正当化の一種と見なされるだろう。一方、反認知主義をとる論者はここで問題になっているのは実践的正当化だと見なすかもしれない。ここではいずれの立場が正しいとも仮定しない。

- ²¹. ネーゲル自身は「現在のわれわれにとって重要であったり、深刻であったり、貴重であったりするように**思える**ことも、もしわれわれが異なったありかたをしていれば、そうは**思われない**のである」(Nagel (1971), p.722, 邦訳, p.29. 強調は引用者)と書いている。しかし、これは非常に誤解をまねく表現である。もし、私たちが重要であると考えたことを、重要でないと考える人たちがいたとしても、単にその人々が誤っているのであれば、何ら問題をもたらしなからである。本当の問題は、そのいずれが正当化されているのかという規範的問題にあるはずだろう。ファインバーグも同様の批判をしている(Feinberg (1980), p.263).
- ²². 繰り返しになるが、ここで「規準」と呼んでいるのは、それよりも上を「大きい」ものに数え入れる参照点の設定のことである。
- ²³. ただし、ニヒリストには、高い規準を維持するような実践的理由もないことに気を付けよう。ニヒリストにとっては、何をするかもしれないことも、何ら重要さをもたないからである。しかし、いずれにせよ規準を変更する理由がないのであれば、ニヒリストが高い規準をもちつづけることが非合理であるとは言えないだろう。

参考文献

- Benbaji, Yitzhak. 2001. “The Moral, the Personal, and the Importance of What We Care About.” *Philosophy* 76 (3). Cambridge University Press: 415–33.
- Cross, Charles, and Floris Roelofsens. 2016. “Questions.” In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward N. Zalta, Spring 2016.
<http://plato.stanford.edu/archives/spr2016/entries/questions/>.
- Feinberg, Joel. 1980. “Absurd Self-Fulfillment.” In *Time and Cause*, edited by Peter van Inwagen, 255–81. D. Reidel.
- Frankfurt, Harry G. 1982. “The Importance of What We Care About.” *Synthese* 53 (2). Cambridge University Press: 257–72.
- . 1999. *On the Usefulness of Final Ends*. Cambridge University Press.
- Hagstrom, Paul. 2003. *Glott International* 7 (7/8): 188–201.
- Hanfling, Oswald. 1987. *The Quest for Meaning*. Open University 良峯徳和訳. 1992. 『意味の探求』玉川大学出版部.
- Hare, R. M. 1972. “Nothing Matters.” In *Applications of Moral Philosophy*, 32–47. London, Macmillan.
- Kahane, Guy. 2016. “If Nothing Matters.” *Noûs* 50 (2): 1–27.
- Kennedy, Christopher. 2007. “Vagueness and Grammar: The Semantics of Relative

- and Absolute Gradable Adjectives.” *Linguistics and Philosophy*, 30(1). 1–45.
- Metz, Thaddeus. 2007. “The Meaning of Life.” In *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward Zalta.
- Nagel, Thomas. 1971. “The Absurd.” *Journal of Philosophy* 68 (20). *Journal of Philosophy Inc.*: 716–27 永井均訳. 1989. 「人生の無意味さ」『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房, 17–9.
- Parfit, Derek. 1984. *Reasons and Persons*. Oxford University Press 森村進訳. 1998. 『理由と人格』勁草書房.
- Patrick D. Elliot, Yasutada Sudo, Nathan Klinedinst, and Wataru Uegaki. forthcoming. “Predicate of Relevance and Theories of Question Embedding.” *Journal of Semantics*.
- Smith, Quentin. 2003. “Moral Realism and Infinite Spacetime Imply Moral Nihilism.” In *Time and Ethics: Essays at the Intersection*, edited by Heather Dyke, 43–54. Kluwer Academic Publishers.
- Williams, Bernard. 1973. “The Makropulos Case: Reflections on the Tedium of Immortality.” In *Problems of the Self*, 82–100. Cambridge University Press.
- Wolf, Susan. 2011. “Meaning in Life and Why It Matters (Markus R  ther).” *Philosophischer Literaturanzeiger* 64 (3). Princeton University Press: 308.